

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530574
研究課題名（和文） 成人女性の子育てにおける世代継承性に関する研究
研究課題名（英文） Development of generativity of middle-aged woman with child-rearing experience

研究代表者
加藤 道代（KATO MICHIO）
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60312526

研究成果の概要（和文）：

子育て経験をもつ成人女性は、乳幼児一時預かり活動において余裕をもった第三者の視線で母子に関わることを通じて、必要とされる自分という認識や生活の張りとともに、自分の子育てへの心残りを感じた。活動から得られたスキルや知識は、成長したわが子の子育てに役立てられ、過去や現在、今後の自己や他者との関係が再考された。成人中期の女性における育児支援者としての発達に関して、エリクソンの世代性概念を背景に議論された。

研究成果の概要（英文）：

The effects of temporary child-care support activities on middle-aged female helpers with child-rearing experience were investigated. Participants could be detached and relaxed and tenderly care for other's children, by not taking a mother's perspective. They realized themselves playing a vital role by care-giving, while expressed some regret about their parenthood such as, "I wish I could have known then what I know now." Knowledge gained by care activities was very useful when participants had grandchildren. The findings suggest that middle-aged women who participate in temporary child-care activates recall their child-rearing days and ascertain their current and future life-stages. Mid-life development through care-giving is discussed in the context of Erikson's construct of psychosocial generativity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：成人期発達、中年期、女性、世代性、子育て支援、一時預かり、子育て経験、ボランティア

1. 研究開始当初の背景

先行研究では、母親発達過程における道具的、精神的支えとして、実母、姑、姉、従姉、あるいは、近隣の友人知人など、子育て経験のある女性が必ず存在する。それでは、概ね中年期にある先輩の母親が伝えようとするものは何なのか。また、自身の子育て体験は後輩への援助行動にどのように活かされ、以後の自分にどのような影響を与えるのか。以上のような問題意識から本研究は構想された。

2. 研究の目的

乳幼児を育てる時期をひと段落した女性が、自発的に、子育ての最中にある女性に対する支援者となる場として「託児ボランティア」に着目した。新米の母親の安全基地となるために、先輩の母親の「親体験」はどのように機能するのか。後輩への援助行動によって、自身の親子関係はどのように回顧され、以後の子育てはいかに再構築されるのか。これらを具体的な問いとし、援助することによる援助者の発達と次世代の子育てへ向けたポジティブな世代継承性を明らかにし、社会資源の循環と相互支援社会について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究1 第一子が小学校低学年の母親8名を対象に、高校卒業から現在までの期間で「あなたが助けを求めれば助けてくれそうだと思う人や、実際に助けてくれた人」について回顧的に語ってもらう半構造化面接を行った。

(2) 研究2 母親のサポートネットワークを中心に先行研究をレビューした。

(3) 研究3 仙台市内で乳幼児の一時預かりを実施しているボランティア団体に調査を依頼、同意を得て、託児場面における継続的参与観察を行った。

(4) 研究4 仙台市で子育て支援を行う団体を通じて、乳幼児を育てる母親を対象に、一時預かり利用に関する質問紙調査を行い189名の回答を得た。

(5) 研究5 子育て体験をもつ中年期女性託児ボランティア5名を対象に、「自分の体験してきた子育て」「一時預かり活動への動機」「一時預かり活動による影響」に関する半構造化面接を行った。

(6) 研究6 市民センター、保健福祉センター、子育て支援グループ等を通じて、40代～60代の成人女性を対象に、世代性と被援助性についての質問紙調査を行い122名の回答

を得た。

4. 研究成果

主要な成果は以下のとおりである。

(1) 研究1 親になった最初期の女性には、子育て経験のある先輩女性（実母、姑、姉、従姉、友人知人女性等）が、道具的、精神的な支えとして存在していた。この「先輩-後輩」関係は、地縁血縁の有無や年齢の上下にかかわらず「親体験」によっていること、後輩にあたる新米の母親は、子育て生活の中で次第に自分よりも未経験の母親を支えるようになっていくことがわかった。さらに、受けた援助の返報は必ずしも直接の援助者に向けられるとは限らず、別の他者との関係の中で果されていた（加藤, 2007）。

(2) 研究2 子育て期の母親のサポートネットワークに関して、ネットワークの構造、機能、代替・補完性、ネットワーク形成の生態学的文脈などの視点から先行研究をレビューした結果、ネットワーク変容過程はライフコースにおける役割の変化に関係すること、しかし生涯的にネットワーク構築スキルがどのように発達するのかという検討が極めて少ないことを指摘した（加藤, 2008）。

(3) 研究3 参与観察によって体験したエピソードを蓄積した。その結果、預かる側（先輩母親）の先行体験は、一時預かりにあたって役に立つものと役にたたないものがあり、預かった子どもや預ける親（新米母親）への共感だけではなく違和感も感じていた。そうした体験は、過去の自分自身の子育てを振り返り、現在の子育てを思い返す契機となっていた。預ける側は、子どもについての視点の転換と新たな子ども理解、解放感とともに子どもに引止められる気持ちを感じている。援助-被援助関係は、教示・助言等による一方的な「与える→与えられる」関係ではなく、「与える⇄与えられる」という相互作用であることが推察された（加藤, 2009）。

(4) 研究4 一時預かり利用経験者と未経験者の母親を対象に、母子の生活時間、育児ストレス、一時預かり利用の躊躇、経験者における利用後の変化について質問紙調査を行った。その結果、母子だけですぐず時間の長さや育児生活へのストレス感に有意な関連は認めないが、一時預かり利用にあたって子どもの反応を考えて躊躇する度合いが高い群は低群に比べて、育児生活へのストレス感が有意に高かった。預かり未体験者と同様

に、預かり体験者も最初の利用時には躊躇があったが、利用後は概ねポジティブな変化（一時預かりのイメージ、預けることに対する自分の気持ち、日々の子育てに向かう気持ち）を感じていた。経験者の9割は一時預かり利用時の子どもの様子について夫とよく話しており、夫、祖父母の反応についてもネガティブな変化はほとんど見られなかった。子育てを底支えする地域の一時預かり支援の重要性が確認された（加藤, 2010c）。

(5) 研究5 面接調査からは、以下のことが明らかとなった。子育てを経験した中年期女性の託児ボランティア活動への動機は、乳幼児の世話や子育て中の母親理解への自負と、子育てがひと段落したことによる「何かしたい」という思いであった。しかし預ける母親の自分本位な預け方に直面すると、母親たちへの励ましを超えてより教育的な配慮を含むようになった。託児で出会う子どもには、自分の子育てと異なり、第三者的な余裕ある視点により優しく対応できることに気づいた。子どもの世話をする中で、「現役としての自分」、「必要とされる自分」という認識が生じ、活動は「生活の張り」と感じられた。同時に、自分の子育てに対して、「今ならわかることを、あの時わかっていたらよかったのに」という心残りを感じた。託児体験によって得られたスキルや知識は、既に成長したわが子や嫁の子育てに役立てられていた。以上のように、託児活動を通じて、女性たちは自らの子育てを振り返りとらえ直し、人生における現在と今後の自分の立ち位置に気づくことが明らかになった（加藤, 2010a）。

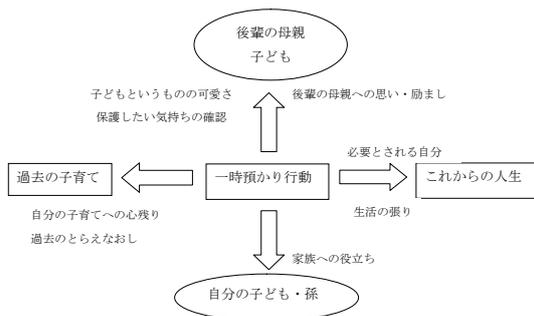


図2 一時預かり行動のもたらすもの

(6) 研究6 世代間の「援助-被援助」の多元的關係を検討するために、「創造性」「世話」「世代継承性」からなる世代性関心尺度（丸島・有光, 2007）と被援助性尺度（他者の力を借りること、借りてもよいと思うこと）から構成された質問紙調査を行った。その結果、世話意識と被援助性意識の間には中程度の正の相関関係が認められ、配偶者の存在が世話や被援助性の高さに関連しており、

子どもの存在は世代継承性や被援助性の高さに関連していた。一方、家族外の社会活動体験は創造性の高さに関連しており、より個としての自我形成を促進するものと考えられた。地域への帰属感の高さは世代継承性に関連していた（加藤, 2010b）。研究1に示したように、成人期は多彩な経験の種類や度合いによって、「援助-被援助」の網の目状の相互作用が生じており、受けた援助の返報は必ずしも直接の援助者に向けられるとは限らず、別の他者との関係の中で果されている（加藤, 2007）成人期初期から中年期には、多様で固有の体験が積み重ねられていくことを考慮に入れると、成人期はある体験においては先輩であり、別のある体験においては後輩である。同輩同士の「もちつもたれつ」関係を含め、成人期には、周囲の他者との間の「援助-被援助」関係によってケアの相互作用、すなわち循環的還元社会が構成されているのではないかと考えられた。

(7) まとめ 以上の研究結果を総合し、一時預かりの場が「支援-被支援」関係を通じて新米母親と先輩母親双方の世代性発達を促す場となりうることを示された。特に、成人期中期において自らの子育てをとらえ直し、人生における現在と今後の立ち位置に気づいていく支援者としての発達に関して、エリクソンの世代性の概念を背景に議論された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

(1) 加藤道代 2010 子育て経験をもつ成人女性による一時預かり活動—支援することによる発達— 東北大学大学院教育学研究科年報 査読無 58(2) (印刷中)。

(2) 加藤道代 2010 中年期女性における世代性と被援助性に関する検討 東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要 査読無 8

9-17.

(3) 加藤道代 2009 成人女性が子育てボランティア行動に託すもの—一時預かり場面の参与観察による考察— 東北大学教育学研究科臨床心理相談室紀要 査読無 7 28-42.

(4) 加藤道代 2008 移行期としての子育て期—母親のサポート・ネットワーク変容の視点から— 東北大学教育学研究科臨床心理相談室紀要 査読無 6 8-25.

(5) 加藤道代 2007 子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化(2) 東北大学大学院教育学研究科研究年報 査読無 55(2)243 - 270.

〔学会発表〕(計9件)

- (1) 加藤道代 中年期女性における世代性と被援助性に関する検討 日本発達心理学会第21回大会(2010/3/26:神戸国際会議場)
- (2) 加藤道代 成人女性が子育てボランティア活動に託するもの～事例による検討～ 第63回東北心理学会(2009/6/20:弘前大学)
- (3) 加藤道代 精神的な問題をもつ母親に対する子育て支援の可能性と課題 日本発達心理学会第20回大会(2009/3/23:日本女子大学)
- (4) 加藤道代 2歳を第一子にもつ父親の育児行動～父親コンピテンス、および母親の養育意識・行動との関連から～ 第49回日本母性衛生学会総会学術総会(2008/11/5:舞浜シェラトングランドパイトーキョーホテル)
- (5) 加藤道代 母親は「子育ての区切り」をどのようにとらえるのか～第一子誕生から8年目の振り返りの中から～ 第62回東北心理学会(2008/7/20:東北大学)
- (6) 加藤道代 子育て期の母親の「被援助性」に関する研究 第10回フィールドワーク社会心理学会(2008/3/26:宮城蔵王レインボーヒルズ)
- (7) 加藤道代 預けることと預かることー「一時預かり」の場から見えてくるものー日本発達心理学会第19回大会(2008/3/21:大阪国際会議場)
- (8) 加藤道代 子育て期のライフイベントが母親の「被援助性」に与える影響～子どもの病気・怪我に注目して～ 第61回東北心理学会(2007/9/6:岩手大学)

〔その他〕

ホームページ等

- (1) 加藤道代 2010 一時預かりに関するアンケート調査結果報告書 1-21.
(仙台市宮城野区家庭健康課, 一時預かりボランティアグループ, 調査協力者に向けてフィードバックした。今後、一時預かりボランティア養成講座等で配布することを考えている。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 道代 (KATO MICHIO)
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 60312526

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし